

How to Translate Hawthorne's 'Neutral Territory' into Japanese?

井 上 久 夫 *

Abstract

Nathaniel Hawthorne, one of the greatest American writers, published *The Scarlet Letter* containing the preface "The Custom House" in 1850. In the preface Hawthorne uses that well-known term 'neutral territory'. 'Neutral territory' is "somewhere between the real world and fairy-land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other."

Not only American but also Japanese researchers on Hawthorne's works are interested in 'neutral territory', and they often refer to this key term in their writings, that is to say, their books, essays, translated books, and so on.

I was surprised to notice that they translated 'neutral territory' into several different kinds of Japanese. And the surprise made me search for the answer to the following questions: (1) why didn't some researchers follow or use previous translations in their writings? (2) does the best Japanese translation of 'neutral territory' exist? If so, what is it? I will give an answer to these questions in this essay.

キーワード：ホーソーン、ニュートラル・テリトリー、間（あわい）

はじめに

19世紀のアメリカ人作家ナサニエル・ホーソーンは1850年に『緋文字』（*The Scarlet Letter*）を発表した。この作品には「税関」（"The Custom House"）という数十頁からなる序文が付されている。その序文のなかに 'neutral territory' ということばがある。

'neutral territory' は実に魅力的なことばで、誰もその意味について考察を深めたいという欲求に駆られるようである。それは、このことばが、ロマンス論という範疇だけに止まらず、更なる深み、広がりをもっていると直観的に感じるからに違いない。小生もそのことばに魅かれる一人なのである。

そこで、小生はまず、'neutral territory' を日本語でどう表現することが適切なのかを考えるとところから出発しようとした。ところが、この第一歩でつまづいてしまった。どのような訳が適切なのか、迷いが生じたのである。そこで、これまで日本語で著されたホーソーン関連の研究書、邦訳本を中心に先行訳に当たってみることにした。すると興味深いことに、多様な訳が付されていたのである。

もはや、'neutral territory' の持つ深さ、広さについて考察し、論じるどころではなくなった。先行訳があるにもかかわらず、なぜ研究者たちはあえて異なる訳を付けざるを得なかったのか。また、これまでさまざまに訳されてきたが、最適と見做すことができる日本語訳というものはあるのか。あるとすればどのような訳が最適と言えるのか。そういった問いかけがわき起こってきたのである。

そのようなわけで、本稿では、それらの問いかけに対する答えを提示することをその目的とする。

I

日本語訳について考える前に、'neutral territory' がどのような文脈のなかで用いられているのかを原文で示しておく。

Moonlight, in a familiar room, falling so white upon the carpet, and showing all its figures so distinctly, —making every object so minutely visible, yet so unlike a morning or noontide visibility, —is a medium the most suitable for a romance-writer to

* Hisao INOUE 教育学部教授

get acquainted with his illusive guests. There is the little domestic scenery of the well-known apartment; the chairs, with each its separate individuality; the centre-table, sustaining a work-basket, a volume or two, and an extinguished lamp; the sofa; the book-case; the picture on the wall; —all these details, so completely seen, are so spiritualized by the unusual light, that they seem to lose their actual substance, and become things of intellect. Nothing is too small or too trifling to undergo this change, and acquire dignity thereby. A child's shoe; the doll, seated in her little wicker carriage; the hobby-horse; —whatever, in a word, has been used or played with, during the day, is now invested with a quality of strangeness and remoteness, though still almost as vividly present as by daylight. Thus, therefore, the floor of our familiar room has become a *neutral territory*, somewhere between the real world and fairy-land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other. Ghosts might enter here, without affrighting us. It would be too much in keeping with the scene to excite surprise, were we to look about us and discover a form, beloved, but gone hence, now sitting quietly in a streak of this magic moonshine, with an aspect that would make us doubt whether it had returned from afar, or had never once stirred from our fireside. (CE: I, 35-36) (Italics mine)

最初に、'neutral territory' の日本語訳を索引に挙げている研究書を中心に、邦訳本、学会誌を含めて、このことばがどのように訳されてきたのかを出版年順に示しておく¹⁾。

資料 'neutral territory' の日本語訳

出版年	表題／頁：日本語訳	著者	出版社
1952	『緋文字』 41：「中立地帯」	福原麟太郎	角川文庫
1969	『鏡と影—ホーソン文学の研究』 108：「中立地帯」 108：「中立の地帯」 〈参考168：「憑かれた心」中間領域〉	鈴木重吉	研究社
1970	『世界文学全集17 緋文字／美の芸術家他』 39：「中立的な領域」 〈参考455：「憑かれた心」中間の地帯〉	大橋健三郎 他 訳	集英社
1984	『まなざしのモチーフ—近代意識と表現』 12：「中間地帯」 137：「中間の地帯」	桂田重利	近代文藝社
1987	『どう読むかアメリカ文学—ホーソンからピンチオンまで』 5：「中間地帯」 16-17：「"neutral territory"」	三宅卓雄	あほろん社
1992	『完訳 緋文字』 55：「中立地帯」	八木敏雄	岩波文庫
1996	『アメリカ社会の批評家としてのホーソン』 52：「中間領域」	山本 雅	溪水社
1999	「ホーソンと『日本遠征記』」 『アメリカ文化のホログラム』 23：「中間地帯」	阿野文朗	松柏社
2000	『恐怖の自画像—ホーソンと「許されざる罪」』 159：「中間領域」	丹羽隆昭	英宝社
2004	『ホーソン・《緋文字》・タベストリー』 129：「中間地帯」 〈参考146：「幻の出没する心」中間時間〉	入子文子	南雲堂

1) 本稿では、'neutral territory' を索引に載せている研究書を主に取り上げた。したがって、著者が用いた資料の数は少ないと見做されるかもしれない。しかし、資料として掲載した研究書他は、日本のホーソン研究者に多大な影響を与えてきたものなので、'neutral territory' の日本語訳に関しては、ほぼ間違いなく網羅していると考えてよからう。

2006	『「税関」に漂う父性と母性のイメージ——ユングが照らし出すホーソンの内的世界』『フォーラム』 11 30:「中立地帯」	高島まり子	日本ナサニエル・ホーソン協会
2012	『ホーソン研究——神話と伝説と歴史』 138:「中間地帯」	松阪仁伺	英宝社
2012	『ホーソンと孤児の時代——アメリカン・ルネサンスの精神史をめぐって』 73:「中間地帯」 81:「中間領域」	成田雅彦	ミネルヴァ書房
2013	『ラバチーニの娘——ナサニエル・ホーソン短編集』 訳者あとがき 217:「中間地帯」	阿野文朗	松柏社
2013	『ロマンスの迷宮——ホーソンに迫る15のまなざし』 まえがき iii:「中間地帯」	高島まり子 (編集代表)	英宝社
2013	『預言者のペルソナ、母の息子——『緋文字』におけるホーソンの死と再生』『アメリカ文学のアリーナ——ロマンス・大衆・文学史』 17:「中間地帯」	中野学而	松柏社

以上のように、'neutral territory' は、「中立地帯」「中立の地帯」「中立的な領域」「中間地帯」「中間の地帯」「中間領域」の六種類に訳されている。大雑把にいうと、「中立地帯」「中立領域」「中間地帯」「中間領域」の四種類に訳されているのである。

さて、この資料を見ていると 'neutral territory' の訳には大きく二つの特徴があることに気づく。

第一の特徴——'neutral' に関しては、1952年～1970年までは3冊すべてで「中立」、1984年～2013年までは13冊の内11冊で「中間」と訳されている。また、'territory' に関しては、1952年～2013年まで、16冊の内13冊で「地帯」と訳され、「領域」と訳されているのは僅か3冊である。

第二の特徴——同一著者で同一著書であるにも拘らず、頁によって 'neutral territory' の訳（表現）が異なっているものが4冊ある。

それでは、次に、これら二つの特徴に対して自ずと派生してくる問いに対する答えを探ってみることにする。

II

第一の特徴から派生してくる問い、すなわち、なぜ1970年まで主流であった「中立」が、1984年以後「中間」に取って代わられたのか、言い換えれば、多くの研究者たちが、「中立」という訳語を避け、「中間」という訳語を選んだのかという問い、に対する答えを探るために、「中立」と「中間」、そして「中立地帯」と「中間地帯」がどのように定義されているのかを調べ、主要なものを記すことにする。

「中立」

①岩波書店『広辞苑』第三版 1983

- ・いずれにもかたよらずに中正の立場をとること。
- ・いずれにも味方せず、いずれにも敵対しないこと。国際法上、国家間の紛争や戦争に関与しないこと。いかなる軍事同盟にも参加しないこと。

②集英社『国語辞典』第二版 2000

- ・争う二者に対して、どちらにも味方せず、また敵対しないこと。どちらにも偏らず、中正なこと。
- ・国家が、他国間の紛争・戦争に参加しないこと。無援助と公平を原則とする。

③大修館書店『明鏡国語辞典』初版 2003

- ・対立する二者のいずれにも味方しないこと。中正の立場をとること。
- ・国際法上、戦争に参加しない国家の交戦国に対する地位。原則として交戦国双方への無援助が義務付けられる。

これに対して、「中間」はどうか。

「中間」

①岩波書店『広辞苑』第三版 1983

- ・二つの物事の間。相對するものの距離または間隙。
- ・相對するもののまんなか。なかほど。

②集英社『国語辞典』第二版 2000

- ・二つの物事の間。空間や距離が二つのものや地

点の間であること。真ん中。

- ・程度や性質などが両極端の間にあること。どちらにもつかず特徴がはっきりしないこと。

③大修館書店『明鏡国語辞典』初版 2003

- ・二つの物の間。二つの物のほぼまんなかにある位置や空間。
- ・物事の性質・程度などが両極端の間にあること。

続いて、「中立地帯」と「中間地帯」を調べてみる。

「中立地帯」

①岩波書店『広辞苑』第三版 1983

- ・平時において、要塞の建造または兵の駐在を禁止された地帯。また、戦時において、交戦国の軍隊の中間に指定して相互に兵力を入れないことを協定した一定の地域。非武装地帯。

②集英社『国語辞典』第二版 2000

- ・平時または戦時下で、相互に兵力の進駐などが協定で禁じられている緩衝地帯。
- ・中東の砂漠地域で、国境が不明確な部分を便宜的に共同管理とした地帯。

③大修館書店『明鏡国語辞典』初版 2003

見出しなし

「中間地帯」

上記の辞書には、見出しとして掲載されていない。

以上、辞書の定義から判断すると、「中立地帯」は、一般的には、兵士、軍隊、戦いを連想させる可能性が高いことばであることが分かる。それゆえ、そのイメージを‘neutral territory’から払拭したいという思いを抱いている研究者たちは、換言すれば、「中立地帯」という語の響きが「税関」で示された‘neutral territory’の持つイメージを損なうと感じた研究者たちは、「中立地帯」という訳を使用することに何らかの違和感を覚えたのではないだろうか。

また、「中立」には「いずれにも、味方しない」、あるいは「関与しない」、すなわち「相手と一線を画する」といった意味合いが含まれているのに対して、「中間」には「程度や性質などが両極端の間にあること。どちらにもつかず特徴がはっきりしないこと」とあるように、「一線を画する」という意味

合いは含まれていない。むしろ、両方の要素を合わせ持つことによって、それぞれの特徴がはっきりしなくなる、という意味合いを含んでいる。このことから考えると、「中立」という訳を積極的に用いるための根拠が乏しいために、結果として多くの研究者たちの訳が、1980年代以降、「中立地帯」から「中間地帯」へと移っていったと見做してよからう。

さて、次に、‘territory’の訳について考えてみる。1952年～2013年まで、ほとんどの研究者が「地帯」と訳しており、「領域」と訳している例はごく僅かである。なぜ、このような流れになったのだろうか。その理由について考えてみたい。そのために、まず、「地帯」の定義を調べ、主要なものを記すことにする。

「地帯」

①岩波書店『広辞苑』第三版 1983

- ・限られた一定の地域。

②集英社『国語辞典』第二版 2000

- ・ある特徴をもつ一定の地域

③大修館書店『明鏡国語辞典』初版 2003

- ・ある特徴や目的によって区切られた一定範囲の地域。

これに対して「領域」はどうか。

「領域」

①岩波書店『広辞苑』第三版 1983

- ・国際法上、一国の主権に属する区域。
- ・学問・研究などで、その関係者が関心をよせている部門。

②集英社『国語辞典』第二版 2000

- ・力の及ぶ範囲。
- ・専門の分野。

③大修館書店『明鏡国語辞典』初版 2003

- ・あるものが関係する範囲。ある力・作用などが及ぶ範囲。

以上、「地帯」と「領域」の定義を比較してみると、「領域」は「地帯」とは異なり、抽象的なものをも含む意味を持っていることが分かる。たとえば「あるものが関係する範囲。ある力・作用などが及ぶ範囲」という定義も見られる。そして、その定義には「関係性」と「変化」を感じさせる意味合いが含ま

れている。それにも拘らず、なぜ、多くの研究者は、「領域」ではなく「地帯」を用いたのか。その理由は一体どこにあるのか。

ここで、もう一度、'neutral territory' がどのような文脈のなかで用いられているのかを見てみよう。

Thus, therefore, the floor of our familiar room has become a *neutral territory*, somewhere between the real world and fairy-land, where the Actual and the Imaginary may meet, and each imbue itself with the nature of the other. (Italics mine)

'neutral territory' とは、「現実の世界とおとぎの国との間のどこかであり」「現実的なものと想像的なものとが出合い、それぞれ相手の性質をしみ込ませる」「territory」であるわけで、先ほど述べた辞書の定義を合わせてみると、どう考えても、「地帯」と訳した研究者が大多数で、「領域」と訳した研究者がごく僅かである、ということは不思議である。なぜ、「中間領域」と訳さずに、「中間地帯」と訳したのだろうか。この点について考えてみたい。

だが、その前に、I 章で挙げた第二の特徴から派生してくる問い、すなわち、「同一著者で同一著書であるにも拘らず、頁によって 'neutral territory' の訳（表現）が異なっているのはなぜか」という問いに対する答えを探ることにする。

先ほど挙げた資料、「neutral territory」の日本語訳を見ると分かるように、同一著者で同一著書であるにも拘らず、頁によってその訳（表現）が異なっているものが4点ある。文脈がある程度分かるように具体的に示しておく。下線部は筆者が施した。

1. 『鏡と影—ホーソーン文学の研究』(1969)

- ・鏡のように、ホーソーンにとってロマンスは、「現実と想像が出会うような中立地帯」となるべきものであった。(p. 108)
- ・「私たちの見慣れた部屋の床は、現実の世界とお伽の国との中間にある中立の地帯となってしまう……」(p. 108)

2. 『まなざしのモチーフ—近代意識と表現』(1984)

- ・つねに家系の罪を意識して現実と想像の「中間地帯」をロマンス化したホーソーンと、「二つの世界の中間地帯」に家系の罪の詩劇化をもとめたエリオット……(p. 12)

- ・最初の長篇、『緋文字』の序文になった「税関」には、この実体と映像との関係が、「中間の地帯」(neutral territory)の言葉をとってあらわれ、これは一つの室内風景にたとえられている。(p. 137)

3. 『どう読むかアメリカ文学—ホーソーンからピンチョンまで』(1987)

- ・setting というものは、ホーソーンのロマンス論の中核とも言えるべき有名な“中間地帯”(“neutral territory”)の概念、即ち“the Actual と the Imaginary とが相会して互いの性質にまじりあうところの現実世界とおとぎの世界の中間地帯”の概念と調節に関わりをもつものであり……(p. 5)
- ・前に言及した“neutral territory”、即ち the Actual から一歩離れて the Imaginary の方へ一歩近い領域、を setting として与えるというのがロマンス作家ホーソーンにとって一貫した根本課題であった。(p. 16)

4. 『ホーソーンと孤児の時代—アメリカン・ルネサンスの精神史をめぐって』(2012)

- ・ホーソーンのロマンス論は、その本質を教えてくださいよりもむしろ、あいまいな言葉の煙幕の背後にその本質を隠すのである。ロマンスの生まれるという「中間地帯」(neutral territory)—「現実的なものと想像的なものとが出会う」空間……(p. 73)
- ・ここでは、ジョナサン・ピューなる人物の残した書類と布切れの緋文字 A の発見、また、「中間領域」(neutral territory)という有名な概念を中心にしたロマンス論が展開されている。(p. 81)

上記の1.～4.の例から何が見えてくるのか。

先ず、1.と2.に関して述べておく。この二つの例を通して見えてくるのは、'neutral territory' を含む原文を引用文として日本語に訳す際には「中立の地帯」あるいは「中間の地帯」とし、持論を展開

する際の引用語として用いる場合は「中立地帯」あるいは「中間地帯」としていることである。すなわち、ホーソーンの定義を強く意識している場合と持論を強く意識している場合とで、訳し分けを行っていることが見えてくる。これによって読者に、‘neutral territory’ということばの持つ微妙な意味の違いを示そうとしているといえよう。

次に、3. の例に関して述べておく。「中間地帯」(‘neutral territory’) の概念、即ち‘the Actual」と‘the Imaginary」とが相会して互いの性質にまじりあうところの現実世界とおとぎの世界の中間地帯の概念」と表現されているのであるが、これ以降は「neutral territory」となっている。「日本語訳(原語)」を初出とした場合、それ以降、日本語表記で統一するのが一般的であるが、ここでは、あえて原語表記にこだわっている。それは、1. と2. の例と同様の理由だと考えてよからう。「the Actual」から一歩離れて‘the Imaginary」の方へ一歩近い領域」という表現によって分かるように、‘neutral territory’は決して‘the Actual」と‘the Imaginary」の「真ん中」ではなく‘the Actual」に近い territory であるという、持論を展開するために必要な一要素をここで示そうとしている。ホーソーンの定義を強く意識している場合と持論を強く意識している場合とで、訳し方を変えているのである。この他、別の理由も考えられるかもしれない。もしかすれば、適切と思われる日本語訳がどうしても見つからなかったために、仕方なく、‘neutral territory」という原語を用いざるをえなかったのかもしれない。

続いて、4. の例に関して述べておく。「ロマンスの生まれるという「中間地帯」(‘neutral territory)」と記すと同時に、別の頁では「ここでは、ジョナサン・ピューなる人物の残した書類と布切れの緋文字Aの発見、また、「中間領域」(‘neutral territory)……」と表現している。そして、それ以降は「中間領域」に訳を統一している。いずれも括弧付で‘neutral territory」と記しているということは、明らかに、二つともホーソーンの定義を強く意識している訳であることを表わしている。したがって、この例に関しては、1. と2. の例とは明らかに異なる。ここから見えてくるもの、それは‘neutral territory’をどう訳すべきか、と迷いながら、最終的にあえて二通りの訳を付けざるをえなかった苦悩の跡である。3. の例における二つ目の理由と同じ

だと見做してよからう。

以上をまとめると、同一著者で同一著書であるにも拘らず、頁によって‘neutral territory’の訳(表現)が異なっている理由は、一つには、「‘neutral territory’を含む原文を引用文として用いる場合」と「持論を展開する際の引用文あるいは引用語として用いる場合」との意味の違いを読者に意識させるため、すなわち、ホーソーンの定義を強く意識している場合と持論を強く意識している場合との違いを読者に気づかせるためであると考えてよからう。そして、いま一つは、適切な日本語訳が見つからなかったため、と考えてよからう。

III

先ほど保留にしておいた点、すなわち、なぜ、多くの研究者は、「中間領域」と訳さずに、「中間地帯」と訳したのだろうかという点について考えてみたい。

『ラパチャーニの娘—ナサニエル・ホーソーン短編集』(2013)の訳者あとがきに、次のような記述がある。

このように「現実」と「空想」が交錯する領域を、作者自身「^{ニュートラル・テリトリー}中 間 地 帯」と呼んだが、読者は、ホーソーンが基本的にこの「中間地帯」に構築されていることを忘れてはならない。ホーソーンのいわゆる「中間地帯」とは、作者自身の説明を借りると、「現実の世界」と「おとぎの国」の間のどこかにある領域で、そこでは「現実」と「空想」が交錯し、お互いの特性が混じり合って、独特の小説世界が構築されるというのである。(p. 217)

ここでは、‘neutral territory’を「中間地帯」と訳している。そして、「中間地帯」に関して、「「現実」と「空想」が交差する〈領域〉を、作者自身「^{ニュートラル・テリトリー}中 間 地 帯」と呼んだ」、また、「ホーソーンのいわゆる「中間地帯」とは、作者自身の説明を借りると、「現実の世界」と「おとぎの国」の間のどこかにある〈領域〉」と表現している。しかし、もしも、「中間地帯」の代わりに「中間領域」を、〈領域〉の代わりに〈地帯〉を用いた場合は、次のようになる。すなわち、「「現実」と「空想」が交差する〈^{ニュートラル・テリトリー}地 帯〉を、作者自身「中 間 領 域」と呼んだ」、また、

「ホーソーンのいわゆる「中間領域」とは、作者自身の説明を借りると、「現実の世界」と「おとぎの国」の間のどこかにある〈地帯〉」という表現になる。どちらの組み合わせが、表現として自然なのか。ルビがふられていることで「中間領域」と「中間地帯」の意味はほとんど変わらない。だとすると、ここで問題となるのは、「現実と空想が交差する〈地帯〉」と「現実と空想が交差する〈領域〉」を比べて、また、「「現実の世界」と「おとぎの国」のどこかにある〈地帯〉」と「「現実の世界」と「おとぎの国」の間のどこかにある〈領域〉」とを比べて、どちらが自然な表現なのかということになる。前章で示した「地帯」と「領域」の定義から判断すると、「領域」がより自然な表現であることは明らかであろう。

ここから見てくることは、この文脈において、「地帯」と「領域」を交換すると元の表現よりも不自然になるということである。すなわち、「文脈がことばを選ばせている」のである。

今、「文脈がことばを選ばせている」という表現を用いたが、もう少し、その意味について補足しておきたい。

例えば、もし、「neutral territory」を「中間地帯」と訳すことが適切だと考えていたとする。そして、持論を展開する際に、短篇“The Haunted Mind”のなかの‘intermediate space’ (CE: IX, 305) (資料の〈参考〉を参照)を引き合いに出す必要が出てきたとしよう。(‘intermediate space’がどのような文脈のなかで用いられているのかを原文で示しておく。)

Yesterday has already vanished among the shadows of the past; to-morrow has not yet emerged from the future. You have found an *intermediate space*, where the business of life does not intrude; where the passing moment lingers, and becomes truly the present; a spot where Father Time, when he thinks nobody is watching him, sits down by the way side to take breath. (CE: IX, 305) (Italics mine)

ところが、この‘intermediate space’の訳も「中間地帯」が適切だと考えていたとしよう。そうすると、「neutral territory」と‘intermediate space’の訳がともに「中間地帯」となり、ここで迷いが生じる。

そうすると、「neutral territory」を優先させるか、それとも‘intermediate space’を優先させるかということになる。もし前者を優先するのであれば、前者の訳は「中間地帯」、後者は「中間領域」となる。逆に、後者を優先させれば、前者の訳は「中間領域」、後者は「中間地帯」となる。これはあくまで一つの例であるが、こういうことも含めて「文脈がことばを選ばせる」と表現したのである。「文脈がことばを選ばせ、訳を選ばせる」のである。

「なぜ、多くの研究者が、「中間領域」ではなく「中間地帯」と訳したのか」という問いに対する答えを、「文脈が訳を選ばせたからである」としたい。

とはいえ、本稿のように、「neutral territory」が題目に含まれている場合には、その日本語訳が必要となろう。確かに、本稿の場合、「ホーソーンの‘Neutral Territory’をどう訳すべきか」という題目であるので、「neutral territory」を日本語に訳す必要はない。だが、もし、題目が「ホーソーンの‘Neutral Territory’に関する一考察」であったなら、日本語訳を示す必要があろう。その場合、どのような訳が適切なのだろうか。

まず、題目であるがゆえに、とりわけそれによって読者に誤解を与えないようにすべきであろう。その意味では、「中立地帯」は避けるべきだと考える。辞書の定義から判断すると、「中立地帯」は、一般的には、兵士、軍隊、戦いを連想させ、誤解を与える可能性が高いことばだからである。また、「中立」は、「一線を画する」という意味合いを強く感じさせることばで、「neutral territory」の持つ「互いが混ざり合う」、「互いの性質をしみこませる」という意味を含んでいないことばだからである。

では、「中間地帯」と「中間領域」のどちらが適切か。すでに示したように、「地帯」には、「あるものが関係する範囲。ある力・作用などが及ぶ範囲」という「領域」に含まれる「関係性」を表わす定義が含まれていない。‘neutral territory’に含まれている、「両方の性質がお互いにしみこむような「関係性」」ということを考えるとき、「中間領域」のほうが「中間地帯」より適切な訳であると見做すことができる。

「文脈が訳を選ばせる」とはいえ、論文題目に用いられている場合などを含めて考えると、「ホーソーンの‘Neutral Territory」の最適の訳は、「中間領域」であるといつてよからう。

おわりに

ごく最近、新たな訳が可能ではないかという思いに駆られている。2013年の中秋に、知人と懇談する機会があった。そのなかで、著者の話を聴いていたその人²⁾が、それは「間（あわい）」の感じに似ていると思うのですが、といった。小生は「間」を「あわい」と読むことさえ知らなかったので、さっそく辞書に当たってみた。

「間（あわい）」

岩波書店『広辞苑』第三版 1983

- ・物と物、時と時とのあいだ。ま。すきま。
- ・物と物、また、人と人との組み合わせ。
- ・おり。都合。形勢。

「間（あわい）」は、現在、市民権を得ていないことばであることは間違いなかろう。したがって、'neutral territory' を「間（あわい）」と訳すには無理があるかもしれない。しかし、間（あわい）が含まれている多様な意味を知り、また、特にその響きの柔らかさを感じるとき、ホーソーンの 'neutral territory' の日本語訳として、「間（あわい）」が最適に思えてくるのである。

引用／参考文献

〔作品〕

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. Vol. I of *The Centenary Edition*. Ed. William Charvat, et al. Columbus: Ohio State UP, 1962.

———. *Twice-told Tales*. Vol. IX of *The Centenary Edition*. Ed. William Charvat, et al. Columbus: Ohio State UP, 1974.

〔研究書〕（ホーソーン関係の単行本を出版年順に記載）

鈴木重吉 『鏡と影—ホーソーン文学の研究』 研究社 1969.

桂田重利 『まなざしのモチーフ—近代意識と表現』 近代文藝社 1984.

三宅卓雄 『どう読むかアメリカ文学—ホーソーンからピンチオンまで』 あぼろん社 1987.

山本 雅 『アメリカ社会の批評家としてのホーソーン』 溪水社 1996.

阿野文朗（編著）『アメリカ文化のホログラム』 松柏社 1999.

丹羽隆昭 『恐怖の自画像—ホーソーンと「許されざる罪」』 英宝社 2000.

入子文子 『ホーソーン・《緋文字》・タペストリー』 南雲堂 2004.

松阪仁伺 『ホーソーン研究—神話と伝説と歴史』 英宝社 2012.

成田雅彦 『ホーソーンと孤児の時代—アメリカン・ルネサンスの精神史をめぐって』 ミネルヴァ書房 2012.

中野学而 「預言者のベルソナ、母の息子—『緋文字』におけるホーソーンの死と再生」『アメリカ文学のアリーナ—ロマンス・大衆・文学史』 松柏社 2013.

高島まり子（編集代表）『ロマンスの迷宮—ホーソーンに迫る15のまなざし』 英宝社 2013.

〔学会誌〕

高島まり子 「『税関』に漂う父性と母性のイメージ—ユングが照らし出すホーソーンの内的世界」『フォーラム』11 日本ナサニエル・ホーソーン協会 2006.

〔邦訳書〕（ホーソーン関係の邦訳本を出版年順に記載）

ホーソーン, ナサニエル 『緋文字』 福原麟太郎訳 角川文庫 1952.

ホーソーン, ナサニエル 『緋文字／美の芸術家 他』 大橋健三郎、小津二郎訳、『世界文学全集』17 集英社 1970.

ホーソーン, ナサニエル 『完訳 緋文字』 八木敏雄訳 岩波文庫 1992.

ホーソーン, ナサニエル 「訳者あとがき」『ラパチーニの娘—ナサニエル・ホーソーン短編集』 阿野文朗訳 松柏社 2013.

2) 翻訳の仕事に携わっている梅津朋子氏との懇談の機会を通して、間（あわい）ということばを知ることができた。